時流を読む

福岡正信を見よ

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

わら一本の革命

この8月下旬、イタリアの農村を歩いてきたが、あらためてイタリアでの福岡正信に対する人気が根強いことに驚かされた。

読者は果たして福岡正信をご存知であろうか。著書『わら一本の革命』で知られる自然農法家だ。愛媛県伊予市の郊外の農場で自然農法を営み、2008年8月に95歳で亡くなっている。

根底にある考えは「人間は自然の野草、野菜の一つ一つが何であるかを知ろうとすれば、かえって昏迷の知恵の渦巻きのなかにまきこまれて混乱し、自然の真価が見出せないままに、別の偏向した価値、不完全な価値を追いかけることになる」として、「一切の価値・人知・人為を否定し、無為自然に生きる道」を説いた。これに対応した農法は、不耕起、無肥料、無農薬、無除草を四大原則とし、種まきは、さまざまな種を混ぜて粘土団子を作ってこれをばら撒く。その中から土地にあったものが芽を出してくるとする。

世界で最も知られる日本人

この自然農法は、大規模投資を必要とする近代農法とは違って、まったく投資を必要としない。また適地適作、農作物の高低差を生かしての立体農業とも重なることからインドをはじめとするアジアやアフリカ等の途上国を中心に受け入れられ、大いに評価もされてきた。1988年にはインドのガンディー首相から「最高栄誉賞」、フィリピンからはアジアのノーベル賞とも言われる「マグサイサイ賞」を受賞するなど、その貢献大であることを雄弁に物語っている。

余談にはなるが、筆者がワシントンにある某博物館に足を運んだ折、〝日本の部屋〟があって、日本人3人が紹介されていた。禅仏教の鈴木大拙、食養生の桜沢如一、そして福岡正信。世界は、こんなふうに見ているのかと、これまた驚かされたことがあった。

有機農業の原点とは

イタリアではミラノを拠点にして農村を回ることにしているが、地域農業を支援する産消提携グループであるGASのメンバーがいつも集まってくれる。有機農業や有機農産物の流通の動向等についての情報交換を常としている。

今回はずいぶんと福岡正信に話題が集中することに。すなわちイタリアでは有機農業による栽培面積比率が14%にまで増加してきたが、併行して大手流通が生産をも支配するようになってきたという。こうした中、小規模・家族経営の有機栽培農家は、あらためて有機農業の原点を求めて福岡正信への関心を強めているらしい。「イタリアで有名な福岡正信は、日本で知る人は少ない」との私の話に、彼らはしばし茫然。

筆者は25年程前に福岡農場を訪れ、親しく話をお聞きし、昼食までご馳走になった。そして自らささやかに自然農法にも取り組んできた。広く福岡正信を知ってもらうために、もっと情報発信しなければと反省させられた次第である。